

【講演会報告】

未来の図書館 研究所では、2017年11月29日午後2時より、未来の図書館 研究所 オープン・レクチャー (LoFR Open Lecture) および交流会を開催した。講演者として、筑波大学知的コミュニティ基盤研究センターの外国人研究員として来日されていた、Hermina Anghelescu (ハルミナ・アンゲレスク) 教授 (訳者解説で経歴を紹介) をお招きし、*Coming Out of the Cold War: from Censorship to Globalization in Romanian Libraries* との題目で、共産主義時代から革命を経て現代までの、ルーマニア公共図書館の状況、近代化への歩みについてお話しいただいた。実際に行われたセンサーシップや公共図書館の新たな立ち上げを語った講演に対して、質疑応答でも交流会の場でも、活発に意見が交わされた。

原稿掲載につきご尽力いただいたアンゲレスク氏、ならびに講演会での逐次通訳および本稿を執筆いただいた、立教大学図書館の江原つむぎ氏に心より御礼を申し上げる次第である。

.....

冷戦から抜け出して

ルーマニア公共図書館のセンサーシップからグローバル化への歩み

講演者 ハルミナ・アンゲレスク¹

翻訳 江原 つむぎ²

1. はじめに

本稿では、講演者自身の経験を踏まえて、共産主義時代のルーマニアにおいて図書館、そして、関連する周辺分野でどのようなセンサーシップ (検閲) が行われたのかを紹介するとともに、共産主義時代に大幅に遅れた図書館の近代化を米国ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団の支援を受けていかに推し進めたかを報告する。

¹ ウェイン州立大学情報科学研究科 (米国ミシガン州デトロイト) 教授

Professor, School of Information Sciences Wayne State University, Detroit, Michigan

² 立教大学図書館 Rikkyo University Library

2. 共産主義政権の始まり

共産主義時代の検閲について述べる前に、まずは、共産主義世界の複雑さを理解するために歴史、地理、政治の各観点から共産主義政権の始まりについて捉えておく。

2.1 歴史

1939年、ナチスドイツは、ソ連と相互不可侵条約（条約に署名した外務大臣の名前をとってモロトフ＝リッベントロップ協定とも呼ばれている）を結んだ。条約は、ポーランド、リトアニア、ラトビア、エストニア、フィンランド、そしてルーマニアを領土と政治の面で再編成し、ドイツとソ連の影響下におくという秘密議定書を含んでいた。条約締結後の1939年9月、ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発した。大戦開始から6年後の1945年2月、英米ソ3か国首脳会議（ヤルタ会談）によってヨーロッパの戦後秩序の枠組みを決める大戦終結のプランが描かれた。会談では、事実上、ソ連に東欧を支配する権利が与えられたが、その結果としてソ連による共産主義の拡大が認められたと西側諸国が感じる事となり、冷戦が起こる原因となった。

1947年2月に締結されたパリ平和条約では、当初枢軸国側だったイタリア、ルーマニア、ハンガリー、ブルガリア、フィンランドに主権国家としての国際関係における権利の回復および国連への加盟権が認められた。条約には、領土の回復および国境線の変更が含まれており、結果として、ルーマニアは領土を割譲することとなり、領土が減少してしまった。

2.2 地理

ルーマニアは、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての戦争のはざまに最大の領土を有していた。しかし、第二次世界大戦後の国境線の変更により、現在のモルドバ共和国、およびウクライナの一部となっている地域がソ連に組み込まれ、著しく領土が減少することとなった。

2.3 政治

冷戦は、1945年から1989年まで、およそ半世紀続いた。冷戦とは、ソ連とその同盟国対米国とその同盟国の二つの陣営間の争いを指し、モスクワ衛星国とも呼ばれる東側諸国（ソ連圏）においては共産主義に基づく政治が展開された時期であった。1961年に建設されたドイツ・ベルリンの壁は人々の移動を制限し、物理的に国家や家族を分断した。また、それは、西側＝自由、東側＝統制という心理的な分断をも生んだ。

その後、1980年代に始まったポーランドの「連帯」運動や、1986年からソ連でミハイル・ゴルバチョフによって推し進められたグラスノスチ（公開）、ペレストロイカ（再構築／再建設）のなかで、「一党独裁」や「党＝国家への絶対服従」に代表される共産主義政権の支配力が弱まっていった。

1989年、冷戦が終結し、ベルリンの壁崩壊やチェコスロバキアの革命、ルーマニアの革命と、共産主義政権が連続して倒される年となった。続いて1990年から東西ドイツ再統一、ソ連崩壊、ユーゴスラビアの分離、ボスニア・ヘルツェゴビナやコソボなどでの民族浄化の内戦が起こった。

3. 共産主義の実際

前項では、どのように共産主義政権が起こったのかを説明したが、次に、そのもとで起きていた状況について述べる。

実際の共産主義政権は、労働者階級（プロレタリアート）による独裁で、野党のない、共産党一党支配を指す。現実世界では、共産党上層部による独裁で、工場、土地、建物だけでなく、美術品や貴重書コレクションなどを含むすべての個人財産が政府の所有物とされ、政治、経済、社会、文化のすべてが政府の管理下におかれた。

文化面について掘り下げて説明すると、学校教育、出版、新聞や雑誌の発行所、テレビやラジオの放送局、劇場、映画、音楽といった娯楽産業、通信システム、そして図書館へ出資し、国営化することで、共産主義政権は、すべての文化教育活動を統制し、独裁体制を敷いた。学校教育では、共産主義を押し進めるようなカリキュラムを国が決定していた。すべての文化機関は、政治的プロパガンダや、大衆教化、反西洋的な価値観の醸成、洗脳の目的で利用された。有害で危険だとみなされた知的活動は、検閲を通じて統制されていった。

4. 共産主義下のルーマニアにおける検閲

ルーマニアでの検閲について話す前に、「検閲」とは何を指すのか整理する。検閲とは、およそ民主主義とは相いれず、全体主義、独裁制、共産主義と共に出現する用語で、内容の削除・改変、またはアクセスの禁止によって情報公開を統制する行為である。例えば、猥褻本や、政治的に受け入れがたいまたは政権を脅かすいかなる書籍、映画、ニュース、芸術などの発売・公表を禁止する行為や、言論の自由、公衆通信の自由など、いかなる種類の情報アクセスの自由を制限する行為である。検閲は、政府当局や地域社会の「合意」によって、政治的社会的に好ましくない、有害である、国家機密にかかわる、「政治的に正しくない」、または、不都合だとみなしたものに対して行われてきた。

第二次世界大戦以前は、ルーマニアを含め、中欧・東欧の大部分は君主制国家であり、そのすべてが婚姻によって親戚関係にあった。例えば、君主制は廃止されているものの、現存の王の中で最年長 96 歳のルーマニア王ミハイ 1 世³は、イギリス女王エリザベス 2 世のいここにあたる。しかし、1945年の第二次世界大戦終結後、台頭してきた共産主義が支配権を奪い、中欧・東欧諸国では君主制が廃止された。王は退位を強要され、亡命を余儀なくされた。

³ 本講演が行われたわずか6日後の2017年12月5日にスイスで亡くなった。

ルーマニアでは、1945年の段階では、権力は持たなかったものの、国王ミハイ1世は国内に留まり、共産主義政権と共存していたが、2年後の1947年12月30日に強制的に退位させられ、同日、共産主義政権による正式な国家、ルーマニア人民共和国が成立した。この共産主義政府は、熱心に全体主義国家の基礎構築を行い、ソ連のバックアップを受けて共産主義がルーマニア国内で広まるにつれて厳しい検閲を行うようになった。検閲は政治、経済、文化のあらゆる分野で行われた。

家庭においてさえ、タイプライターの警察への届出が法律で義務付けられており、チラシなど反政府的なものを作成すれば、すぐに突きとめられた。国民は外国人と会うことを禁じられたし、秘密警察がいたるところにいて、見張られていた。講演者自身を含め、多くの国民が秘密警察に尾行され、個人ファイルが作られていた。多くの知識人は、反体制派と指定され、自宅軟禁措置となった。

4.1 文化面における検閲

ルーマニアの共産主義政府は、「党＝国家」のプロパガンダにより国民の記憶に残っている可能性のある共産主義時代以前のシンボルや芸術品を消し去った。共産党員は「共産主義時代以前のすべての形跡を消すこと」を目的に芸術品をコントロールし始めた。つまり、すべて君主制と関連するものは違法となった。そして、政府は、共産主義時代以前のすべての組織を解体し、芸術遺産を取り除くだけでなく、俳優、音楽家、画家といった多くの知識人を逮捕、投獄、殺害、強制収容所へ送致・収容した。

厳しい検閲の対象となったのは、装飾芸術、舞台芸術、メディア（報道）、TV、ニュース、出版業、図書館、団体活動、宗教・信仰生活である。このうち、いくつかについて詳しく説明する。

4.2 装飾芸術

君主制時代の王族や貴族、高官を描いた公的な場に置かれた絵画、彫刻、彫像といったすべての装飾芸術は取り除かれた。そのうちのいくつかは倉庫にしまわれ、あるものは物理的に破壊された。しかし今では、第一次世界大戦100周年記念として、過去の写真を参考にして、いくつかの彫像が元々あった場所に戻されている。破壊されてしまったものは、レプリカが作成された。例えば、馬上のカロル1世（ミハイ1世の祖父）像は、首都ブカレストの王立宮殿と大学中央図書館の間にある公共広場に設置されていたが、共産主義時代に倒され、溶かされてしまったので、1990年代中頃にレプリカが設置された。

4.3 舞台や映画

すべての舞台は上映前に検閲官の承認を得なければならず、セリフは厳しく調べられ、「有害」な内容は削除された。イデオロギー面に問題ないことが確認されている東側諸

国の作者による脚本や映画作品が好まれる一方で、西側諸国で作成された映画は、検閲官の審査を受けなければならない、有害な段落、シーンは削除された。例えば、映画『サウンドオブミュージック』の教会での結婚式シーンは、共産主義の推し進める無神論に反するために削除された。教会生活はあってはならなかった。

4.4 テレビ 国民は何を見ていたか

全国で受信可能な国営放送局は一局のみで、放映時間は 19 時から 22 時までの 3 時間と決まっていた。放映番組は、政党活動と工業・農業分野の業績中心の 1 時間ニュースで始まった。ニュースには、多少は文化的なニュースも含まれていた。続いて、偉大なるリーダーの功績を称賛する 1 時間番組が流れ、ニュースの再放送で終わりだった。週末には、東側諸国で作られた映画が「ご褒美」として放送された。

4.5 専門職団体

共産主義政権は陰謀や反政府的な共謀を恐れ、国民に集会の自由を認めなかった。そのため、専門職団体は存在し得なかった。

4.6 宗教／信仰生活

共産主義は無神論を推し進めた。ルーマニア国民の実に 86.5%が東方正教会、4.5%がローマカトリック、3.2%が改革派（カルヴァン主義）、2%がペンテコステ派だったが、教会へ通うことは奨励されていなかった。そして、街の近代化を口実に、主に首都ブカレストで多くの教会が取り壊された。取り壊されずに済んだ教会は、共産主義様式の建築物の後ろに隠されたり、追いやられたりした。宗教書は図書館で簡単に読めるものではなかったし、ましてや書店で手に入るものではなかった。

4.7 出版業界

政府による認可を受け、政府資金で経営されていた出版社は、全国でわずか 16 社だった。文化省（社会主義教育文化国家評議会）による検閲（イデオロギーチェック）を受けつつ、すべての出版社で社内検閲も行っていた。詩でさえも、すべての原稿は、印刷の許可が下りる前に厳しい検閲が行われ、共産主義に従順でない内容は、原本からも翻訳本からも削除され、ときには出版は差し止められた。対象となった著者は懲戒された。

5. 共産主義下ルーマニアにおける図書館

共産党の方針と主義に共鳴し、支持するように市民を政治教育する機関という役割を図書館は担っていた。市民たちのイデオロギーと政治的アイデンティティを形成するために、共産党のプロパガンダと大衆教化の道具として図書館は利用された。館内には共産主義・社会主義の三大思想家であるマルクス、エンゲルス、レーニンによる作品のどっしりとした蔵

書が備えられ、書架全体が赤い布で縁取られていた。図書館は、本の倉庫になり、利用は極端に低くなった。しかし、図書館数は劇的に増加した。実際には利用されていなかったのにもかかわらず、当時の統計に図書館利用の減少は見て取れないので、調査や研究で参照する際には注意が必要である。

どの工場にも共産主義を広めるための政治コレクションを有する労働組合図書館が設置され、共産主義・社会主義の書籍を蔵書に加えることが図書館員の使命だった。どの組織にも少なくともひとつは2、3の棚に政治的な本が並ぶ「（共産主義を表す）赤のコーナー」があった。

5.1 発禁本リスト

共産主義政府は、1945年に発足するや否や、図書館の蔵書に手をつけ始めた。そして、発禁対象作家、および、発禁本のリストを作成し、図書館に配布した。対象となったのは、共産主義政権を少しでも否定する可能性のあるものである。例えば、共産主義政権発足以前の君主制やルーマニア貴族、第二次世界大戦以前の政党や傑出した有名政治家、また、ルーマニアの経済事情をテーマにしたもの、第二次世界大戦で失った領土に関するもの、西側諸国に寄った視点で書かれた書籍、宗教書であった。外国書籍についても、ルーマニアに不利なことが書かれている書籍は対象となった。

国際交流協定先から何箱もの外国書籍が届いた際には、検閲官に検査されてから目的地、通常は大きな図書館へ運ばれたが、検閲官の基準に合わない書籍は、留め置かれた。また、30巻で1セットになっているような百科事典は、CとRの巻が抜かれた。C（チャウシェスク⁴）とR（ルーマニア）の項目が入っている巻は、否定的な内容で書かれており、利用者に読ませる価値がないと判断されたためである。発禁対象になった作家は、共産主義政権発足後に亡命したルーマニア人作家や挿絵画家、ルーマニアを好ましく書かない外国人作家、西側諸国に寄った意見を持つルーマニア人作家、共産主義のイデオロギーに反する意見を持ち、作品にも投影しているルーマニア人作家であった。発禁対象の音楽家一覧、画家一覧、俳優一覧が作成された。

1948年の発禁本リストには約8000タイトルの書籍が並び、蔵書から除籍するよう命じられた。そして、1954年、政府内に書籍の内容や新聞記事、テレビ、ラジオを含むメディア全般のイデオロギー検証を行う特別な部署、報道・印刷物局が作られた。1977年に共産主義政府はルーマニアには検閲機関はもはや存在しないと公然と宣言したが、検閲は継続して行われており、1990年初頭の共産主義崩壊直後になってやっと廃止された。

⁴ ニコラエ・チャウシェスク。20年以上の長期間に亘ってルーマニア社会主義共和国大統領を務め、独裁体制を敷いていた。

5.2 取り除かれた書籍の行方

1970年代に図書館情報学教育も停止されており、当時は専門家の育成がなされていなかったため、十分に専門的な経験や教育・知識を持ち合わせた者ではなく、共産党に忠実な党員が図書館長に任命されていた。「熱心」な館長は物理的に取り除いた書籍を破棄し、存在した痕跡もすべて一掃した。「(図書館の資料保存という使命に理解のあるという意味で)賢い」館長は書籍を棚から取り除きはしたが、安全な場所に保管しておいた。「もっと賢い」館長は書籍を1冊は棚に残し、もう1冊を書庫に保管した。複数の版のある、あるいは、翻訳版があるような場合は、例えば、フランス語版を棚に残し、ドイツ語版は貸出禁止にして、書庫に保管した。

禁書コレクションは Special/Secret の S を取って「S」コレクションとして知られ、全体のものとは別のカード目録で維持管理されていた。目録カードには書籍本体と同じように「S」とわかるように書かれていた。

6. 共産主義の崩壊・革命

6.1 革命

1989年の冷戦終結とともに、ベルリンの壁崩壊やチェコスロバキアの革命、ルーマニアの革命が起き、続いて東西ドイツ再統一、ソ連崩壊、ユーゴスラビアの分離、ボスニア・ヘルツェゴビナやコソボでの内戦などが続いた。共産主義の崩壊は、血を流さない革命(チェコスロバキア)や血なまぐさい革命(ルーマニア)など各国で異なる経緯をたどったが、暴力を伴う場合には、図書館が犠牲になることも多かった。

ルーマニアで起こった出来事は、ひどく暴力的なものだった。あれは一団の人々が共産主義を無理やり転覆させたクーデターそのものだった。彼らは新共産主義者と呼ばれる人々で、30年ほど後の今日でさえ、未だに権力を握り、贈収賄、買収、汚職といった民主的とはいえない難しい価値観に基づいて国家を率いている。革命では、ブカレスト大学図書館前の広場に群衆と装甲車が集結し、大学図書館は火に包まれて燃えてしまったが、ユネスコの寄付によって再建された。ルーマニアと同じく、ボスニアでも国立図書館が戦争の犠牲になった。

6.2 図書館

共産党に代わる新政権が樹立され、1990年代初めに復興が始まると、まず必要なものとして、図書館が建てられた。実は、国立図書館新館は、共産主義政権時代の1980年代半ばに着手していたが、遅々として進んでいなかった。革命後にEU(欧州連合)から借款(資金融資)を受けて30年後の2010年ようやく開館にこぎつけた。

共産主義時代の国立図書館は、共産党に没収された旧証券取引所ビルを使っており、蔵書はすべて閉架であったし、図書館運営には不向きであった。新しい国立図書館は、建物は近代的に見えるが、1970年代半ばに図書館情報学教育を廃止したため、専門家は多

くおらず、蔵書を中心とした目録・書誌活動が主で、情報へのアクセス提供であるとか、利用者のニーズにはまったく力を注がず、サービスは非常に伝統的なものである。

ともあれ共産主義が崩壊し、図書館は新しい時代に突入した。まず、検閲が廃止され、蔵書は公開され、再組織化された。大衆教化の道具として利用された労働組合図書館は閉鎖された。集会の自由が認められないために存在しなかった図書館協会が設立され、図書館法も制定された。海外に対しても開かれるようになった。例えば、IFLA（国際図書館連盟）への加盟、国際会議への参加、職員交換海外研修といったものがある。

制度や組織に限らず、資料についても大きな変化があった。インターネットの到来によって、より多くの情報がオンラインで見られるようになった。全国的に調整されたものではなく、局所的にはあるが、デジタル化プロジェクトが進行しつつあり、デジタルコレクションを共有する「ヨーロッパ図書館 (<http://www.theeuropeanlibrary.org/tel4/>)」にも加盟した。対面式やオンラインチャットで代表されるバーチャルなサービスも導入された。

しかし、一方で課題も残っている。公共図書館は、中央集権的ピラミッド型のシステムであったものから、地方自治体の傘下に入ったために、統率を取りにくく、分散化が進んでしまっている。また、ルーマニアは高いインフレに直面しており、政府や自治体の図書館への資金は明白に不足し、多くの図書館が閉館している。20年ぶりに図書館情報学教育が復活しても十分な訓練を受けた図書館員は不足しており、きちんとした意図をもって建てられた図書館も少なく、近代化が必要だった。

7. ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団

前項の終わりで述べた共産主義政権崩壊後に残された課題に取り組むべく、ルーマニアは、西欧、米国、日本から国際援助を得ていたが、2007年に世界金融危機が起こり、潤沢な資金援助を望むことは難しくなった。それ以降、図書館の発展に関しては、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団グローバル図書館プログラムが主な役割を果たすことになった。

7.1 財団の概要とルーマニアのプロジェクト始動

ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団グローバル図書館プログラムは「32万ある世界の公共図書館をコミュニティの重要な資産として、そして、技術を通じて情報提供者として位置付けながら、10億人の情報弱者の生活を2030年までに向上させること」を目標に掲げて活動を行っている。本プログラムの支援対象となったのは、ポーランド、ウクライナ、ブルガリア、ルーマニアの中欧・東欧4か国である。支援対象の選定基準は、(1)国の規模、(2)公共図書館のネットワークが十分に構築されていること、(3)図書館の基本施設（基盤）があること、(4)図書館への政府による支援があること、(5)図書館員の存在である。

研究業績と IFLA での活動の評価に基づいて、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団から講演者に国別評価実施の打診があり、秘密保持契約に基づいて 2005 年から 2007 年の 2 年間、プロジェクト対象国のコンサルタントを務めた。

7.2 フェイズ 1 試行期間

ルーマニアでは、ビブリオネット (Biblionet) というプロジェクト名で、2007 年から 2008 年の 1 年間の試行期間が設けられ、140 万ドル (2007 年のドル円レート 115 円換算で約 1 億 6100 万円) が投入された。講演者はコンサルタントとして、プログラムと資金の管理運営を行うのは米国の団体が適していると判断し、複数の候補からワシントン を拠点に活動する NGO 団体の IREX (<http://www.irex.org>) を推薦した。ルーマニア側からは、公共図書館図書館員協会 (以下、「図書館協会」とする) を推薦したが、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団にとってこれは挑戦だった。文部省と図書館協会との共同プロジェクトをメキシコで行った際に、投入した資金が政権交代とともに一夜にして突然消えてしまったという苦い経験をしていたためである。ルーマニアの退廃や、政情の不安定さを考慮するとメキシコと同様のことが起こる可能性もあったが、著者は図書館協会設立にも尽力し、協会を理解していたので推薦した。さらに文部省、通信省、地方自治体の首長 (市長) などが加わった。

試行期間中には、さまざまなタイプの公共図書館 10 館を選定した。例えば、40 県あるうちのいくつかの県立図書館、中小都市の図書館、失業率の高い地域の図書館、孤児の多い地域の図書館、買い物に行くにもボートを使わなければならないドナウデルタの地理的に離れた地域にある図書館である。選定された図書館は、パソコンなどの設備を受け取り、図書館員は技術を身につけ、サービスを展開した。

7.3 フェイズ 2 本格始動

フェイズ 1 (試行期間) が成功裏に終わったのを受け、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団は正式にルーマニアにプログラムと資金援助を継続する価値があると判断した。そこでプロジェクトチームは世界金融危機後の 2008 年にルーマニアに入った。当初ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団は 5000 万ドル (約 57 億 5000 万円) を提供する意向だったが、減額され、最終的に約半額の 2600 万ドル (約 30 億円) となった。資金は 2008 年から 2013 年までの 5 年計画に基づき、1 年ごとに割り当てられた。

資金の減額によって、図書館は厳しい選抜競争を強いられ、(1)清潔であること、(2)安全であること、(3)一般の人々への公開用スペースがあること、(4)図書館員がいること、(5)高速インターネット接続があること、の選定基準を満たさなくてはならなかった。

プロジェクトの結果、60% (2280 館) の公共図書館においてパソコン (多くて 20 台) とウェブカメラ、プリンター、スキャナーといった周辺機器の整備が完了した。また、移動研修ラボや地域の研修拠点として活動できるよう 40 あるすべての県立図書館には 11

台のノートパソコンが導入された。プロジェクトによって初めてインターネットに触れた利用者数は 60 万人、研修を受けた図書館員は 4200 人であった。図書館協会の事業（助成金申請、総会の隔年開催、図書館員研修など）も行われるようになった。

プログラムは、都市部と農村部の情報格差の是正や、デジタル・情報リテラシー向上、家族関係への寄与、求職者のサポート、公共図書館への新サービスの導入、図書館員の専門職としての意識向上と地域での認知度向上、図書館利用者講習会の開催、閉館されていた図書館の再開館などをもたらした。

7.4 フェイズ 3 期間延長

5ヶ年計画の最終年である 2013 年が近づくと、設備の価格低下により必要な金額が想定したよりも減少し、予算が確保できたため、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団は 2 年間、2015 年までの延長を認めた。7 年に及ぶ財団の援助によってルーマニアの図書館整備は大きく前進した。今年公開された IFLA の世界の図書館マップ (<https://librarymap.ifla.org/>) でどの程度まで進んでいるのかを確認することができる。

7.5 モルドバ・プロジェクト

ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団は、グローバル図書館プログラム最後の大規模プロジェクトとしてルーマニアに続いて隣国モルドバ共和国でも同様のプロジェクトを実施した。

モルドバは人口わずか 400 万人の小さな国である。歴史的に、ルーマニアの領地であったが、モトフ＝リッベントロップ協定によってソ連に加えられた。かつてはルーマニア語を使用していたが、禁止され、ロシア語が公用語になった。しかし、もともとラテン文字を用いるルーマニア語をロシア語と同じキリル文字で書くことが許可され、それをモルドバ語と呼んだ。

2011 年の専門家会議での審議を経て、翌年の 2012 年に財団の次の対象としてモルドバが選定された。モルドバでは、ノヴァテカ (Novateca) というプロジェクト名で、2013 年から 2014 年の 1 年間の試行期間、2014 年から 2019 年の 5 か年計画となった。1200 万ドル (2014 年のドル円レート 105 円換算で約 12 億 6000 万円) が投入された結果、75% (1000 館) の公共図書館で整備が完了し、1500 名以上の図書館員が研修を受けた。

7.6 まとめ

このようにして、グローバル図書館プログラムを通じて、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団の手厚い支援は、多くの図書館が閉館を余儀なくされた世界金融危機の時期にあって中欧・東欧 5ヶ国 の公共図書館近代化の基礎を築き、中欧・東欧における図書館のグローバル化および情報流通の国際化を推し進めることに成功した。

8. 訳者解説

本講演は、東欧ルーマニアを例に、共産主義政権下の検閲がどのように行われ、図書館の基盤を崩していったのか、そして、復興する過程にいかにか手間と時間と莫大な資金が必要になるのかについて理解を深められる講演となった。

講演者であるアンゲレスク博士は、米国ミシガン州デトロイトにあるウェイン州立大学情報科学研究科教授を務め、IFLA (International Federation of Library Associations and Institutions 国際図書館連盟) 図書館史専門研究グループ長、米国図書館協会図書館史ラウンドテーブル、および、米国図書館情報学教育協会図書館史専門研究グループのメンバーでもある。

ルーマニア、ブカレスト大学修士号取得(Foreign Languages and Literatures (French and English))後、1992年まで13年間ルーマニア国立図書館の司書であった。1989年に共産主義政権が崩壊してから間を置かずしてフルブライト奨学生として渡米し、1994年にテキサス大学オースティン校より図書館情報学修士号 (Library and Information Science), 2000年に博士号 (Library and Information Science) を取得した。1999年より現在に至るまでウェイン州立大学情報科学研究科にて教鞭をとっている。

講演者の旧共産圏における図書館経験については雑誌 *Library Trends* の中欧・東欧・ロシア地域における共産主義の崩壊 25 周年記念特集号ⁱのなかで、図書館の近代化にかかる発展と課題としてまとめてあるので、あわせてご参照いただきたい。

なお、講演に引き続いて活発な質疑応答が行われたが、紙幅の関係上、割愛させていただいた。

ⁱ *Library Trends*. 2014, vol. 63, no. 2 および 2015, vol. 63, no. 4 ※2014–2015年にかけて2巻もので発行された *Library Trends* の特集号「共産主義後の世界の図書館：中欧・東欧・ロシアの25年間の発展」
その他の関連する著作には、次のものがある。

• Malone Cheryl Knott, Anghelescu Hermina Georgeta-Benedicta, Tucker John Mark. *Libraries & Culture: historical essays honoring the legacy of Donald G. Davis, Jr.*, Library of Congress, Center for the Book, 2006, 294 p.

• Anghelescu Hermina Georgeta-Benedicta, Poulain Martine. *Books, Libraries, Reading, and Publishing in the Cold War*, Center for the Book, Library of Congress, 2001, 297 p.